

ガガイモ (ガガイモ科)

2004年11月15日

赤塚城跡公園のバッタ広場もできて4年、だいぶ植相が変わって、チカラシバなどの多年草と陽樹のエノキの幼木が優勢です。これらに絡みつクズに混じってガガイモのゴーヤを細くしたような実が人目を引いています。私にとってこの実は子供の頃の楽しい思い出のひとつです。

初冬の晴れた日、誰もなしにガガイモの実を教室の窓辺にそっと置いておく。小春日和に暖められ、実の片側に口が開いて中から鱗のようにぎっしり並べられた縁に翼を持つ茶色の種子と、きちんと梳られた白髪のような光った毛が現れます。

やがて、この毛が大きく広がり、ほんの少しの空気の動きにもふんわりと浮かび上がります。こうなったら教室は大変です。ある者は下敷きや教科書で扇ぐ、ある者は口を細めて吹き上げる。その次は決まって先生の大声が落ちてきます。「誰だ。そんな物を持ってきたのは。」大声とは反



2003年12月7日
バッタ広場

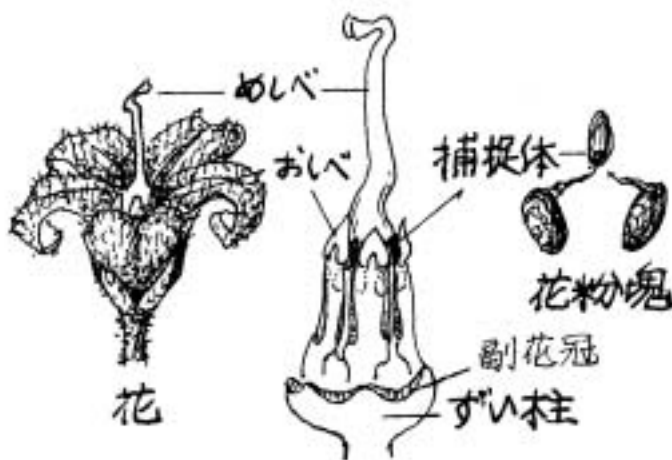
対に先生の目はいつも笑っていました。私たちもこの大声を期待していたような気がします。

ガガイモの白い毛は、タンポポの冠毛とは少し違って、沢山の毛が種子から髪の毛のように生えています。そこで、こうした毛を種髪と呼んでいます。昔はこの毛を止血のために傷口に当てたり、朱と練り合わせて印肉としたり、錆止めとして針刺しに用いたそうです。ガガイモを草斑枝花(くさばんや)とも呼んでいます。

表面にでこぼこがあり、先が少し鉤状になった実(袋果)を気味悪く見たのでしょうか蛇頭草の名もあり、種子が飛んだ後の実の内側がとてすべすべしていることから輝実(かがみ)の意として

鏡草の呼び名もあります。また、出雲神話では、この殻を小船にして 少彦名神(すくなひこなのかみ)が乗って来たとなっています。(絵本野山草 橋保国著 文化3年版・1806年)どんな所が神とつながったのでしょうか。

11月では見られませんが、花もなかなか変わっています。先が5つに割れている合弁花ですが、淡紫色の花冠の内面にぎっしり縮れた毛が生えています。この花冠の内側に、もう一重の花冠(副花冠)があります。中心には長い雌蕊を取り囲んで5本の雄蕊がぴったり張り付いて筒のようになっています(ずい柱)。雄蕊には硬い花粉の集まり(花粉塊)が捕捉体で2つ繋がっています。こんな手の込んだ花の造りをして、どんな昆虫に花粉を運ばせようとしているのでしょうか。



ガガイモの葉は少し厚手で、茎や葉をちぎると白い汁が出てきます。根も少し膨れた芋のようになっています。古くは葉を腫れたところに張ったり、葉や根を強壮のため食したそうです。そのため乳草・蘿芋(かがみいも)・蘿摩芋(らまいも)等の呼び名もあります。しかし、ガガイモのガガは何のことでしょう。かがみいもの訛りでしょうか。

古名・方言名を探してみると多いことに驚かされます(草木名彙辞典では32の名)。今はただ綿毛を飛ばす子供の遊びにしか利用されないようですが、古くは人々の生活に深く関わっていたのでしょうか。まだまだ秘められた事が沢山ありそうで、とても気になる植物です。

(篠原 智男)



2004年8月17日バッタ広場

2004年9月26日バッタ広場

